

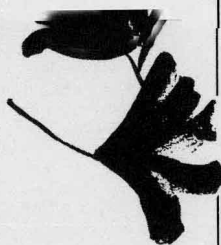


天野茂

不二出版

埋もれた
明治の青春

— 松岡荒村



著者

天 野 茂 (あまの・しげる)

比治山女子短期大学教授

編著書：『松岡荒村 —— 埋もれた

明治の青春』(ペリカン書房、1962年

4月)、復刻版『荒村遺稿』(明治文

献、1965年4月)

住所：芦屋市三条町12番9号

増補版 埋もれた明治の青春——松岡荒村

1982年4月3日 第1刷

定価 = 3800円

著 者 天野 茂

発行者 船橋 治

発行所 不二出版株式会社

〒113 東京都文京区本郷3-16-6

電話 03(812)4433 振替 東京 6-94084

組 版 埼玉福祉会

印 刷 東光印刷

製 本 長島紙工製本所

用 紙 白石紙商事 装 丁 山崎一夫

© Sigeru Amano 1982

乱丁落丁はお取り替えいたします。

0030-018203-7316



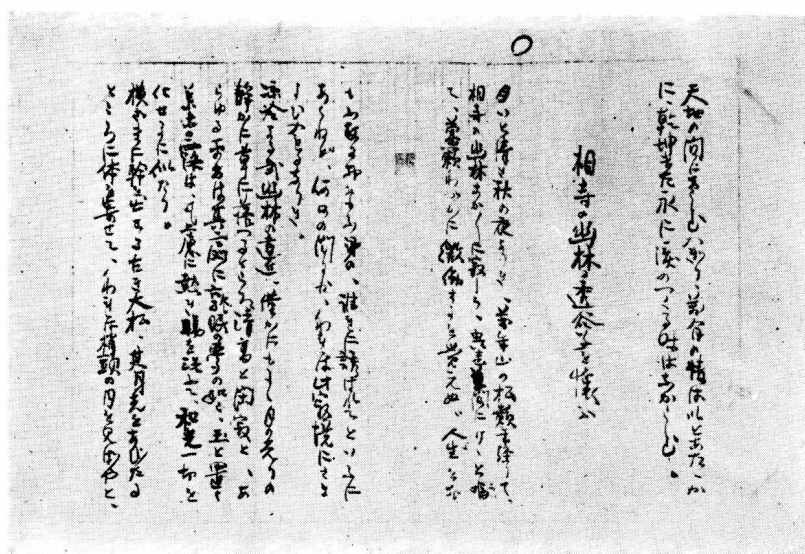
松岡荒村肖像 24才
明治35年11月結婚記念寫真から『荒村遺稿』所収

『荒村遺稿』表紙

明治三十八年七月國光社刊



荒村の筆蹟—『荒村遺稿』所収





荒村在舎当時の同志社東寮

荒村は東寮にいらしてね、よく詩吟をやったものです。よく通る声で。三町ばかり離れていた同志社女学校まで聞えた位でした。一児玉花外談一

同志社中学四年級当時の師友一於彰栄館前明治32年3月寫

(荒木良造氏提供)



荒村一最後列右から5人目、同8人目荒木良造、最左端永井柳太郎

第二列右から 本多精一、山下政吉、伊達源一郎、門田新六、湯浅寿郎、粟生謙

第二列中央写真一新島襄、その左へ横井時雄、清水氏、安部磯雄、ケデー、村上春太郎

同志社時代の荒村



京都市寺町御池
旭館写



明治三十五年大垣市立高女在職当時の志知文子 二十一才

同志社高等学部文科一年級

大八五	金七三	三〇	九八五	九〇八	江口信行
四三五	九四八	三〇	九二九	七三五	北村英郎
九五七	一〇九八	三〇	五五九	九〇八	松岡 悟
					砂川寅男
					泉城精一

明治卅五年三月

同志社高等学部成績表

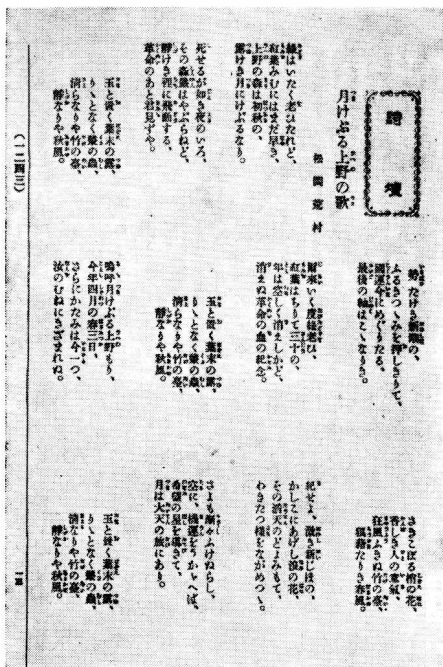
同志社

同志社高等学部文科一年当時の成績表

早稲田大学高等予科学籍簿

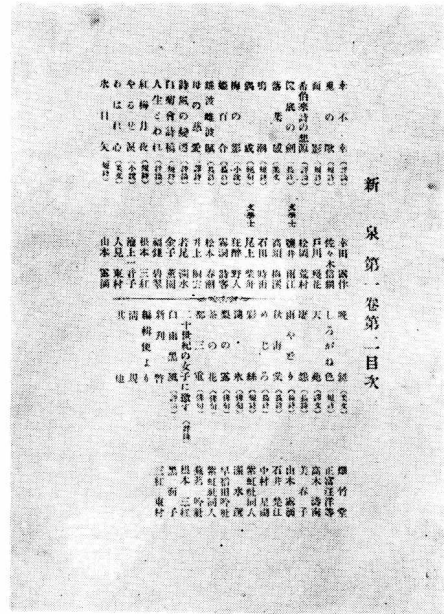
1561	1576	
1575	1580	
1584	1589	
1593	1598	
1610	1615	
1620	1625	
1666	1671	
17	2293	
50	87	
中島長龍	松岡 悟	松岡 悟

松岡 悟	松岡 悟	松岡 悟
松岡 悟	松岡 悟	松岡 悟
松岡 悟	松岡 悟	松岡 悟
松岡 悟	松岡 悟	松岡 悟
松岡 悟	松岡 悟	松岡 悟
松岡 悟	松岡 悟	松岡 悟
松岡 悟	松岡 悟	松岡 悟
松岡 悟	松岡 悟	松岡 悟
松岡 悟	松岡 悟	松岡 悟
松岡 悟	松岡 悟	松岡 悟



『社会主義』（「月けふる上野の歌」掲載）東京大学明治新聞雑誌文庫蔵

『新泉』（「希伯来詩の想源」掲載）昭和女子大学近代文庫蔵



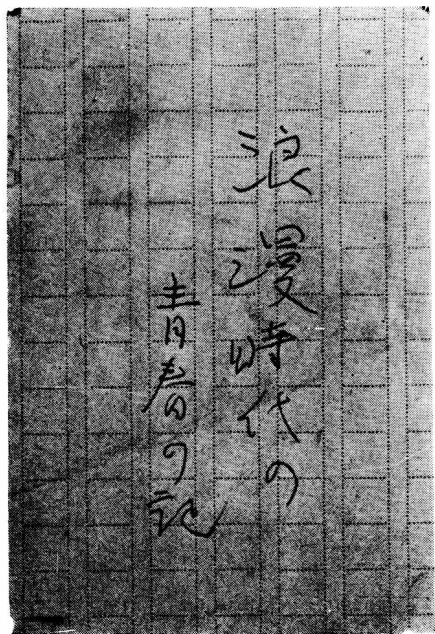


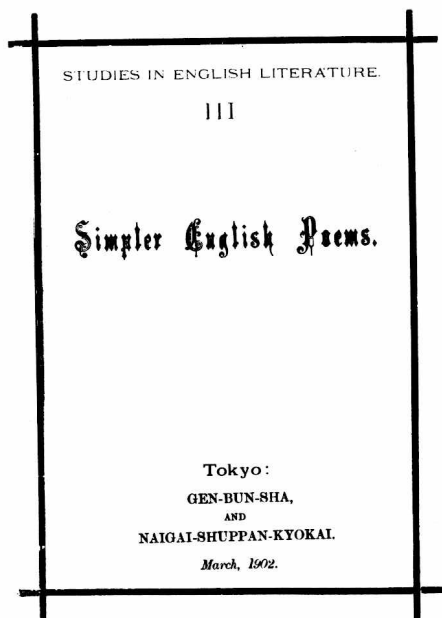
松岡家先祖附の一部

松岡初男氏蔵

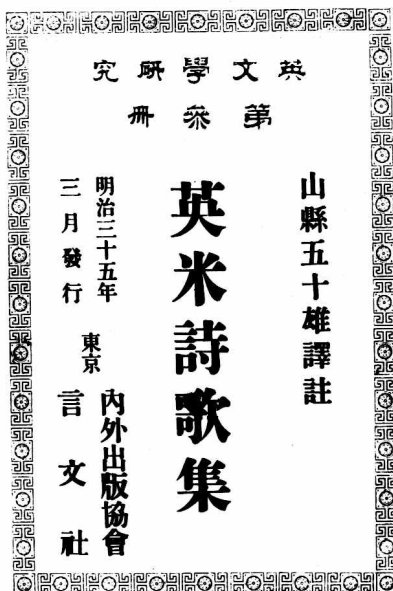
西川文子手記表題

西川文子肖像 昭和29年 72才





(裏)



(表)



(裏)

(表)

昭和36年10月29日発行

発行所 鐘美堂本店(大阪) 同支店(東京)

序

松岡荒村について

住 谷 悦 治

歴史の古い同志社からは、いわゆる「変り種^{だん}」とか「叛逆者」などと呼ばれる青年を輩出している。山川均・高畠素之・遠藤無水などという同志社としてはあまり歓迎されなかった人々はその例であるが、松岡荒村もそうした部類の一人である。したがってこれらの人々について知ろうとしても、同志社内部の記録からは探し出せない。松岡荒村という名だけをわたくしが知ったのはよほど以前のことであるが、偶然の機会に『荒村遺稿』を読んでやや正確なアウトラインを知ることができた。この時に「遺稿」から受けた感想は、今後もっともっと荒村研究が押しひろげられ、掘り下げられる必要があるということであった。ほんとうに幸いなことに、天野茂氏が、松岡荒村と、さらに西川文子とまで併せて深く研究されていることを知って、この意味でわたくしは驚喜したのであった。居ながらにして、労せずして松岡荒村と西川文子のことを全面的に知ることができるからである。忘れられようとした荒村も、着実な、優れた研究者を得てほんとうに浮び上がることができたというものである。

松岡荒村について、わたくしは、昭和三四年に『政界往来』という雑誌に、「勇敢に批判して発禁を喰った松岡荒村——明治時代の国歌『君が代』批判」という一文を寄せたことがある。荒村がタブーとされた国歌「君が代」の歌詞も曲譜も日本民族にふさわしくないものとして辛辣に批判したということは、時も時、国家主義高潮

の明治三十七年のことであり、それを友人白柳秀湖が収録して三十八年に公刊した『荒村遺稿』は間もなく発売禁止となったということ、しかもその後、幸徳秋水の事件を経て皇室に関する言論批判は朝野を通じて極度に神經過敏になったのであるから、荒村の「君が代」批判は記録に値する言論自由に関連した事件であるといってい。わたくしの書いた荒村に関する一文は、その後の研究によってわたくしの誤りが発見されるかも知れないが、いま旧稿の一部を抜いて、この書の序文にかえようと思う。

——松岡荒村は熊本県の出身で、明治十二年（一八七九年）に生れ、名は悟。明治三十三年に京都同志社中学を卒業している。そのころ同志社中学の副校長は、後年社会主義者として、また明治三四年の社会民主党の創立者として幸徳秋水、片山潜、木下尚江、河上清、西川光二郎らとともに著名な安部磯雄であり、教務主任が後年早稲田大学で進歩的な政治学確立者としての浮田和民であり、宗教主任は柏木義円であった。中学生として山川均や足助素一が同じクラスで在学していたところである。したがって、後年の知友白柳秀湖が松岡荒村は同志社の学窓で深く革命の泉を掬んだと云っているのも、このような意味でその雰囲気は感得できるものである。明治三四年のあの足尾鉍毒事件のとき田中正造の活動に感憤し、木下尚江らいくたの進歩的な名士が応援の遊説をしたさい、青年松岡は、京大阪間の会場設置、宣伝などで木下尚江を助けて活動した。その後上京し、社会問題に関心を持ち、社会主義思想の洗礼を受けたり、早稲田学園の早稲田社会学会で活動したりしたが、明治三十七年（一九〇四年）七月二三日に年二六才で病死した。

松岡荒村について、白柳秀湖の追憶記にすぎのような言葉がある。

「君が京都同志社の学窓にあるや、バイロン、シェー、キーツの跡を追慕し、茲に深く革命の泉を掬めり。嵐峽の春、嵯峨野の秋、此間君はいかなる波乱曲折を以て、其うら若き歴史の初頁を彩なされけむ。紅恨紫愁の胸を抱いて濃飛育児院に投じ、南船北馬、遠く野を分けて、至る所無告の孤児に慟哭し、冷酷水の如き社会

の同情を要求せり。君鉆毒問題を耳にするや憤然として驟起し、独渡良瀬の河畔に沿ひ、白葦黄茅の中に、幾多の窮民が皇天に号哭して、奸吏の非道を怨嗟するの声を聴き、義憤心頭に発し、西都に帰るや、忽ちにして沈痛悲壯の弁は、其古端より奔溢して懸河飛瀑の勢を以て、関西人士の肺腑を衝き、麻痺昏醉せる彼等の良心を喚起し、茲に初めて東西兩都の青年が互に相呼応して、正義人道の声を揚ぐるの端緒を闡けり。既にして君が東都に上り、稲門に学ぶや、時恰も日清戦役の後を承け、内には幾多社会問題の瀰漫して、革新的機運の鬱勃たるあり、外に当時西欧の天地に澎湃せる新思想の驚くべき暗流となりて、我岸を洗ふあり、噫此間にありて君は実に、社会主義の思想に触れたりしなり」(松岡荒村君を憶ふ)

荒村は、京都同志社において革命の魂を育んで、後に早稲田にあって社会主義思想に触れ、次第にその思想に統一と組織とを見るようになったというのであるが、早稲田社会学会において白柳秀湖と同志相知ったのであった。その革命といい、社会主義というも思想的に高度になっている現在から思えばもちろん幼稚・粗雑な考えに過ぎないもので、青年としての自由主義的なヒューマンイズムの熱意と燃焼であったといえよう。彼の青年会大挙演説会における「革命の両面」という演説大意によってみてそのことはわかるのであるが、かれは革命の二面をば、第一はフランス革命、とくにロベスピエール一派の激烈党とし、第二は知徳兼備の経論党としてイギリスにおけるウィリアムに示されたる名譽革命と日本の明治維新を挙げ、西郷隆盛や勝安房における「万世の美挙」を讃えているのである。ともかく荒村が熱狂的な、夢多き詩人的なヒューマニストであったことは、かれの遺稿を通じて感得されるわけである。

足尾鉆毒事件のさい、京阪神に救援演説に寝食を忘れて活動した木下尚江の書いた「余は何時如何にして君を知りたる乎」(『荒村遺稿』の序文の二)の中に、「此時京都に一団の青年あり。幹旋最も力め、余等一行をして望外の好成績を得せしめたり。中に一人の尤も機鋭敏活なるものあり、音吐朗々、談論風発し而して俊秀の氣盾宇の

間に動くを見たり。之を松岡悟君となす。余が君と交を結びたるは実に此時に在り」という一節があるが、かれは木下尚江にそのような印象を与えた人物であつた。かれの論文、歌、詩、日記、隨筆等を辿るならば、もちろん、その豊かな才能を、明らかにすることが可能である。……（以下略）――

わたくしの松岡荒村観はこのようなものであり、現在もほぼ同様であるが、何れにしても、明治の社会運動、社会思想、文壇にその名をとどめている木下尚江や白柳秀湖から、このように愛情と好意と熱意とをもって讃えられていることは、彼の並々でない人物を窺わしめるものである。とかく常識的で、無理想で、平凡の合理主義で、事なかれ主義で世を渡つてゆこうとする人の多い今日このごろのわが国に、荒村のような清純な、詩人的ヒューマニストで、たぎる情熱に若い生涯を燃焼しつくした人物を想うことは、乾天の下に一ぶくの清涼剤を飲む心地がするのみか、自分の人生的態度について、またいくたびか反省の機会を与えられるのである。

わたくしは天野茂氏の長年にわたるこの労作が、歴史と文学と読書を愛好する人々のよき友となることを切望するものである。

一九六二年一月二五日

（同志社大学教授）